

科目分類	専門職の教育			開講学科	医療栄養学科
科目番号	学年	配当セメスター	区分	単位数	授業時間数
13067	3	前期	必修	2	30
授業科目名 (英文)	病理学Ⅱ (病態の評価・診断) (Pathology part Ⅱ)				
担当教員名	小西 敏郎				
授業の概要及び到達目標					
<p>病理学ⅠおよびⅡでは、これまでに学んだ解剖学・生理学を統合・整理しながら、できるだけ多くの疾患の病態を理解し、医療の現場での栄養管理の実践において応用が可能になるような知識を広く会得してもらうことを目的としている。</p> <p>病理学Ⅰ (病態の系統的理解) では、様々な疾患における臓器・組織の変化を学び、病気の本態を理解し、病気の診断を確定するための検査などについて総合的に学んだが、病理学Ⅱ (病態の評価・診断) では、実社会に出て実際に医療に携わったときに、栄養士が多く遭遇する疾患、生活習慣病や高齢者によくみられる疾患を中心に、広い分野の疾患の病態・予防・診断・治療について詳しく講義する。</p>					
準備学習等					
<p>病理学Ⅱでは、病理学Ⅰで学んだ人体の構造と機能、および主な疾患の病態についての知識を復習しながら、消化器疾患を中心に栄養管理に役立つ病理学を修得することを目的とする。まず総論的に病理学を修得してから、栄養・代謝・内分泌系、消化器系の疾患を重点的に、循環器系、腎・尿路系、精神・神経系、呼吸器系、血液・造血器系、骨格・運動器系、皮膚系、アレルギー・免疫系の広い領域の疾患のなかで、とくに栄養管理に関連する疾患を重点的に学ぶ。</p> <p>①次頁に示す授業計画に沿ってテキストの該当部分を予習することが望ましい。</p> <p>②授業の最後に重要点についてミニテスト形式の宿題を出し担当学生を指名するので、次回の授業では担当学生が必ず学修結果を発表する。学生全員はこの宿題を中心に復習すること。</p>					
成績評価の方法	期末試験 70% 授業の出席状況や授業中の態度、予習・復習の様子など 30%				
テキスト	カラーで学べる「病理学」第4版 編集 渡辺照男 (ニューヴェル ヒロカワ社発行)				

参考図書	<p>* 栄養科学シリーズ NEXT「病理学」 早川欽哉・藤井雅彦編 (講談社サイエンティフィック)</p> <p>* スタンダード栄養・食物シリーズ4 「疾病の成り立ち」 I、II (東京化学同人)</p> <p>* 病理学を学ぶには、解剖・生理の理解は重要です。1年前・後期に使用した「解剖生理学」(羊土社)を復習しながら、よく理解すること。また病理学Iで使用した「解剖生理学 人体の構造と機能(1)」坂井建雄・岡田隆夫(医学書院)も参考になります。</p>
備考	<p>解剖学と同様に病理学の用語は難解な言葉が多く、外国語も英語だけでなく、ドイツ語もよく用いられている。初めて耳にする疾患名の多いはずである。難解な用語については授業中に積極的に質問して、専門用語を理解し、そして疾患の病態・診断・治療を把握すること</p>
授 業 計 画	
<p>テキスト(カラーで学べる「病理学」第4版) に沿って行うので必ず持参する</p> <p>第1回 解剖生理学概論の復習 前期の試験問題整理・復習 病理学総論 病理学の領域、病理診断検査(巻末)</p> <p>第2回 病理学総論Ⅰ 細胞・組織とその障害、再生と修復、循環障害</p> <p>第3回 病理学総論Ⅱ 炎症、免疫とアレルギー、感染症、</p> <p>第4回 病理学総論Ⅲ 代謝異常、老化と老年病(サルコペニア)、新生児の病理、 先天異常</p> <p>第5回 病理学総論Ⅳ 腫瘍、癌と栄養、カヘキシア(悪液質)、生命の危機</p> <p>第6回 病理学各論① 循環器系疾患</p> <p>第7回 病理学各論② 呼吸器系疾患</p> <p>第8回 病理学各論③ 歯・口腔系疾患、消化器系疾患①</p> <p>第9回 病理学各論④ 消化器系疾患②</p> <p>第10回 病理学各論⑤ 内分泌系疾患</p> <p>第11回 病理学各論⑥ 造血器系疾患</p> <p>第12回 病理学各論⑦ 腎・尿路系疾患、生殖器・乳腺疾患</p> <p>第13回 病理学各論⑧ 脳・神経系疾患</p> <p>第14回 病理学各論⑨ 運動器系疾患</p> <p>第15回 病理学各論⑩ 感覚器系疾患、まとめ</p> <p>(以上の予定ですが、若干変更になることもあります)</p>	